

読み手》と《作品》の真摯な
往還について考えさせられる
行きられてちょうど九十年の『インドへの道』をぬぐって

行されてちょうど九十年の『インドへの道』をめぐって

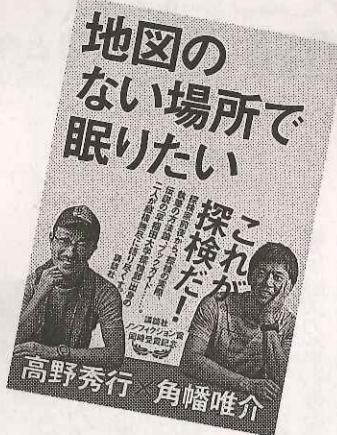
木哲

立野正裕著

► 洞窟の反響

『インドへの道』からの長いが

5・19刊 四六判304頁 本体2000円
発行：スペース伽耶／発売：星雲社



意外な作家養成所

なぜ探検部出身者に作家が多いのか

大野秀樹

高野秀行／角幡唯介 著

▶地図のない場所で眠りたい

4・24刊 四六判296頁 本体1500円

講談社

二十歳で夭折した天才画家・関根正二のヴァーミリオン（朱色）。こもった熱さを表している。この若いときのこもった熱さを持ち続け、具体的に行動し、具体的に本として表現している。十歳離れた早稻田大学探検部出身者の対談集である。二人の第三回講談社ノンフィクション賞の同時受賞を記念して企画された。年長の高野はデビュー作の『幻獣ムンベを追え』（集英社文庫）を除くと、著者は語学力を生かして主に人間を対象にした探検を、一方角幡は出世作の『空白の五マイル—チベット、世界最大のツアンボー峠谷に挑む』（集英社）をはじめ、北極圏など大自然を対象にした探検を主に行ってきた。二人のスタンスはなかなかの自然体で、高野の次の言葉に象徴される。「冒険・探検がいつ好きになつて探検部に入ったのか」という聞かれ方をよくされるんだけど、そうじゃなくて、みんな昔は好きだったのにとんでもないやめてっちゃって」。実は、評者も探検部出身者である。そのため、ガッテン、ガッテンと、まるでかつての仲間の対談集を読んでいるような気分になった。最もガッテンした三點は、（一）探検部のいいところと、（二）は、学生時代になにをやったかというのを卒業してから問わな

人学探検部でも、一九五六年にわが国初の探検部を京都大学に創設した本多勝一を中心、星野道夫（慶應義塾大）、高山文彦（法政大学）、関野誠（一橋大学）、磯宮浩（上智大学）、川成洋、新妻昭夫（北嶋大学）ら、へたな文芸サークルよりも多くの作家を世に出している。高野は、なぜ探検部に作家が多いのかについて、「探検部のやつているほどにかくわけがわからぬ」といふことを大学時代に一所でやっていると、それは「つながりやすい」と推測している。

「反中」「嫌韓」に“傾斜”している
人びとに読んでほしい一書

現地に足を運び、自ら見聞きしたことをベースに学ぶ意義を改めて確認
矢野秀喜

新政府の大蔵
官、短歌、エッセイ、評論、紀行文、学術
書や小説など、様々なジャンルを問いません。自分で自分を文字に
表現する手段として原稿をお持ちの方、書店への
販売を希望される方など、お気軽にご相談ください。

お手伝いをします。

お問い合わせ

図書新聞出版社部

03-3234-3471 FAX 03-3261-4837

e-mail books@toshoshimbun.com